

## あの頃を胸にこれからも

鹿児島玉龍中学校 三年 山元 百音

「人生これからの青年たちばかりだけど、何を考えていたのかな。」  
父はそうつぶやいた。

昨年の五月、私は知覧の特攻平和記念館へ出かけた。「永遠のゼロ」という映画を見たことがきっかけだった。幼い頃から親に戦争について教えてもらっていたので、知っているつもりだった。でも、この映画を見て強い衝撃を受けた。特攻隊として訓練されているのは青年たちばかり。厳しい訓練をこなし、自分の体をミサイルとして戦う。日本の勝利のために命を捨てなければならぬ。生きて帰ってはこれない。特攻隊員の気持ちは全く分からない。でも、映画を見ている間胸が苦しくなり涙がこみあげてきた。

また、知覧の特攻平和記念館へ行ったときもそうであった。資料館の中へ入ると、壁に顔写真がはってある。数は千人をこえるくらいだろうか。皆、二十代から三十代の青年ばかり。中には十代の人もいた。りりしい顔をして写真にうつっていたが、本当のことはわからない。そこで父は冒頭の言葉を言ったのだ。考えていたことはそれぞれ違うだろう。愛する家族や恋人。恐怖や戦争に対して憎しみを持つていたかもしれない。実際に資料館でみた手紙や日記には、前向きなことしか書いていない。しかし、特攻隊であるため、「勝つて必ず戻ってきます」という文はない。かわりに、皆「自分のことを忘れないでください」などと言った言葉を残していた。

しかし、日本はなぜ特攻をするようになったのだろう。特攻がはじまったのは戦争が終わる少し前である。日本の上の方々は、勝ち目がないことが分かっていたはずだ。それにも関わらずに特攻を行った。最後の少しの意地を見せたのだろうか。そうだとすれば、そ

んな意地はいらないと思う。これから日本を支えていったであろう青年たちがいなくなる。戦争に勝てないと分かっていたながらも抵抗を続ける。ただただ日本のためだと思いつみ行かなければならない。資料館ではゼロ戦の模型も置いてあった。緑色の機体に浮かぶ日の丸。特攻隊として日本を出て、特攻に成功したのは二割ほどしかないと知った。それは、ミサイルを積むため、機体を軽くしている。側面の素材が薄くなるということだ。相手に打ち落とされた機体が多かった。これを聞いた私は、呆然とするばかり。「人はロボットではないのに」

今年の八月十五日で日本は戦後七十年をむかえた。新聞やテレビでは、戦争の特集がたくさん組まれ、後世に伝えようとしているのがうかがえた。あと十年もすれば戦争を体験した人はいなくなってしまうだろう。戦争の本当の怖さを伝えることはできない。だからこそ、私たちが学ばないといけないのだ。今は何の不自由もなく毎日平和にすごしている。これがどんなにすばらしいことか、戦争をしていた頃は幸せに生きることがどんなに困難だったかを伝えていきたい。

日本は平和な国と言われるが果たして本当かと思うこともある。殺人が行われることも少なくない。毎日ニュースを見ていると事件や事故に巻き込まれて亡くなっている人もいる。日本の平和さを伝えるには、こんなことがあってはならないのではないだろうか。二〇二〇年には東京でのオリンピックの開催が予定されている。日本が今より、よりよくなるためには日常からの平和がやはり必要だと思う。もう二度と同じことを繰り返さないために。自らミサイルとまらないために。日本のためだと言いつつも内心は死にたくない、怖いと思っていたあの頃を忘れないために、平和な日々を生きる私たちが、日本を支えていく私たちが深く胸に刻み込んでいかなければならない。